

## A STUDY OF THE SIGNIFICATION OF “KAGE” IN *THE SHINKAGE-RYU*

Jun-ichi Kato

The SHINKAGE-RYU—one of the *Kendo* schools—was founded by Hidetsuna Kamiizumi who had been influenced by the KAGE-RYU. He wrote letters (KAGE-MOKUROKU) to Muneyoshi Yagyū in 1566. In each of these letters, he erased the term “陰” (*kage*) and wrote in “影” (*kage*).

The purpose of this study is to clarify how the characters “陰” and “影” were used in the early years of the SHINKAGE-RYU.

The summaries are as follows.

1. There are two significations in the term *kage*. One of them is “陰” (shade); it means the hidden part (invisible). The other is “影” (shadow); and it means something which cuts off the direct rays of light.
2. People had a tendency to favor “mind technique” in each of the schools when they practiced *Kendo* in the early stages. But in the following age of civil strife, they had to tendency to favor “actual fighting technique.” In other words, the hidden “mind technique” became the visible “fighting technique”; so “陰” came to be “影.”
3. When Kamiizumi first wrote “陰,” it was “mind technique” time just as it was in the other schools. But when he finished writing the letters, it had become “fighting technique” time.

My conclusion is that he changed the character to “影” because of social influences.

## 新陰流における「かげ」の意味に関する一考察

加藤 純 一

## 一 緒言

永祿九年、柳生宗厳は、師匠上泉秀綱より四巻からなる『新影流目録』<sup>(1)</sup>を授けられた。この四巻とは、「燕飛」「七太刀」「参学」「九箇」で、これらは絵目録の体裁をなし、当時の打ち合ひの様子が個々の技ごとに画かれている。宗厳は、ここに記されている勢法(かた)を継承すると共に、独自の創意工夫を加味し、柳生家としての新陰流を發展させた。

ところで、宗厳の新陰柳生流の原点となったこの目録は、『新影流目録』と「影」の文字が使われているが、その文字は最初「陰」と記した後、それを消して「影」と書き直している。「新陰流」とは彼が開流した流派名であり、近世の三源流と称される陰流・新当流・念流の三つの流派を学び、特に愛洲移香の陰流の影響を受けたことから、「新」の「陰流」という意味で付けた名称である。したがって、それなりの理由がなければ、そう簡単に名称の変更はしないであろう。

そこで本稿では、この「陰」と「影」をめぐる「かげ」の意味<sup>(2)</sup>について私見を述べると共に、これらのタームと新陰流との係わりについて考察することにする。

## 二 「かげ」の字義

そもそも「かげ」と訓ずる語字には、陰・蔭・蔭・景・影・翳がある。それらの解字から意味を調べて見ると、次のようなことが分かる。

○陰 湿気が籠もってうっとうしいこと。陽(日の当る丘)の反対、つまり日の当らないかげ地のこと。なかにとじこめて、塞ぐのいみを含む。

○蔭 草木のかげ、またはひかげ。覆われ暗い木陰。

○蔭 上から覆って、外部からの難にあわないうように庇うこと。木のかげを蔭というのと同系のことば。

○景 光りによって生じたかげ。境（けじめ）と同系で、明暗の境を生じること。

○影 日光に照らされて明暗のついた像のこと。光りにとつて明暗の境界がついたこと。とくにその暗い部分。

○翳 矢を箱の中に隠すこと。

\* 『学研漢和大典』<sup>(2)</sup>より。

以上からすると、これらの漢字は大別して二つの群にわけることができる。

すなわち、「陰・蔭・陰・翳」は、視覚に映らない、眼に見えない部分の「かげ」を指し、「景・影」は、陽の光りによって生じた視覚的な、眼に見える「かげ」を指すといえよう。

したがって、緒言で触れた「陰」と「影」とでは、音は同じ「かげ」であるが、その解字からするとまったく異なった意味を持つことがわかる。

### 三 「陰」と「影」について

ここで「陰」と「影」について、もう少し詳しく触れておこう。

富永半次郎氏は、その著書『剣道に於ける道』のなかで、この「陰」「影」について次のように述べている。

陰の方は熟字にすれば陰影或は陰翳などといふ時の「かげ」でありまして、陰影或は陰翳といはれる部分が暗くて見えない部分であつて、そのまはりが見る場合であります。これに對して影の方は形影、影向などと熟する場合の如く見えるものの形を主にして申します。——中略——かげに陰陽兩義の使方がある、その現れる方の陽の義の使方の場合の形として現れる方面を主にしてゐるのが影であります。<sup>(3)</sup>

ここで指摘されていることは、先の解字からの区別と一致するところである。つまり、氏の言葉を借りるならば、「かげ」には陰陽の両義があり、陰の指す字が「陰」であり、陽の指す字が「影」なのである。つまり、現象的に捉えられるか否かという点で、この「陰」と「影」にわかれると考えてよからう。

なお、富永氏はこの概念的な区別の後、中世の和歌の例を挙げ、当時は、厳密に両字を使い分けていたことを指摘し、それが時代が経つにつれて、「かげ」の

意味が徐々に混乱してきたことを説いている。そして、このような混乱の結果、近世の徳川時代に入り、上泉秀綱の神陰流（新陰流のことか）の「陰」の意味が問題化されたとするのが氏の述べるところである。

#### 四 新陰柳生流における「かけ」の意味

上泉秀綱は、陰流・新当流・念流の三つの流派を学び、特に愛洲移香の陰流の影響を受け、その名も新陰流と称したことは先にも述べた。したがって、この時期の名称は愛洲移香の陰流の「陰」を用いているのである。ところが、永禄九年に柳生宗厳に与えられた目録の表書きには、『新影流目録』と「陰」の字を消して「影」の字に書き改めている。では、この目録を伝授された柳生宗厳は、「新影流」と「影」の文字を使用したかというところではなく、やはり前の「陰」の字を用いた新陰流という名称を用いている。以後、被伝授者が書き記した伝書類を見ても、「影」の字を用いた「新影流」という名称が使われた形跡は見当らない。

つまり、「影」の字が用いられた新影流という言葉は、上泉秀綱が書き改めたこの『新影流目録』にしか

存在しないことになる。では、何故上泉秀綱は敢えて「影」の字に書き変えたのであろうか。

柳生厳長『正伝新陰流』によれば、新陰流においては「陰」と「影」とは、次のように区別するとしている。

流儀の真体——真諦（ざと）を指すときは「新陰流」、形象または軽く流名を呼称するときは「新影流」と流祖伊勢守信綱がはっきりと区別していたから。

新陰柳生流、あるいは新陰流は「心の流」と言われるように、心法を重んじた流派であるが、そういった流儀の核心に触れる場合は「新陰流」と書き表し、単に流派の外様を指す場合には「新影流」と書き表すといったことを、上泉秀綱が区別していたのである。このことは、先の富永氏による「陰」「影」の字義上からの区別に当てはまるところである。

しかし、この厳長氏の説に対しては異論が見られる。今村嘉雄氏は、その著書『柳生一族』の中でその論を展開しているが、それをまとめると次のようになる。

①そのような性質のものであれば、柳生宗厳自身も使い分けをするはずであるが、そのような形跡は

見られない。

②丸目藏人が元龜三年に田浦遠國に与えた『タイ捨流秘密書』は、上泉が柳生宗厳に宛てた目録と一字一句ほとんど同じではあるが、丸目家の書には「陰流」が「影流」となっており、「影」の字が用いられている。

③永祿八、九年頃に上泉のもとを去ったとされている正田文五郎に対して、柳生宗厳、丸目藏人と同じ目録を上泉は与えているが、そこには『新陰流』と書かれている。

以上が今村氏の論の要旨であるが、その最後に、

丸目家のものが永祿十年、柳生家のものが永祿九年であることから、秀綱が名を信綱と改めた永祿九年頃からは陰を影に改めたのかも知れない。

と結んでいる。このことは、目録とその受け渡し年月の事実と照らし合せても確かなところであり、「信綱」の改名と共にあるいは「陰」から「影」へと修正したことも推察できる。しかし、残念ながら両氏の説からその修正理由を窺うことはできない。

## 五 「陰」から「影」へ（時代背景から）

ここで、何故上泉が「影」の文字に書き替えたかについて考えてみたい。

まず実際にこの目録を見ると、二重線で「陰」の文字が消されて「影」の字が横に記されている。これは、目録を作成中、あるいは作成の後に、上泉が何らかの意図をもって書き替えたと考えて間違いない。では、この目録が書き表された永祿八年前後に、一体何が、何がそうさせたのであろうか。

ここで注目したいのが、富永氏の説である。富永氏は『剣道に於ける道』のなかで、「神陰流より神影流へ」と題して、奥平（奥山）休賀齋公重の神影流を取り挙げ、「陰」から「影」へと移り変わっていった背景を、社会情勢と比較しながら考察をおこなっている。この公重という人物は、上泉秀綱の門弟の一人で、免許皆伝の後、徳川家康に仕えて姉川の戦いに参戦し、その腕を見込まれて刀術を家康に教えるといった経歴を持つ者である。なお、

『奥平系譜・直心影流伝書』には奥山流とせず、新陰を書き替えて神影流に改めた。

とあるように、最初上泉からの「新陰」を用いていた

が、後に「影」の字に改めて「神影流」と流派名を改めている。以下、氏の要旨を記しておく。

そもそも「陰」の字は見えないところを表すわけであり、心法的に言えば相手に自分の心の動きが見えなくなることを表している。すなわち、そのように見えなくなるためには心が働かないのが一番良いわけであり、そのためには、心が思考の作用をしなくなるようにすることにあり、我執が主動的に働かぬように工夫することにあった。したがって、兵法家達は内面的な部分を修行することで心を制御できるようにし、目的が達成できるように努めたのである。これが近世以前の所謂「陰」の領域であるが、近世に入ると多少考え方が変わってくる。つまり、近世以前においては刀法というものが十分に研究されておらず、また系統だっていなかったため、合理的な型や組というものが完成していなく、専ら精神の鍛練の方向にのみ眼が向けられていたが、元来剣術は武術なのであるから、そこに技の練磨がなければ闘争といふことの目的は達成されないといふことは自明である。そこで、そのことから心法が具現化され、より具体的になった刀法というものが工夫、練磨されるようになり、それを受けて、派

内においては刀法の型や組が考案されるようになってきた。ここに、近世以前に「陰」の領域として存在していた部分が、「影」となって現れてきたのであるが、そのような意味合いが「神陰」の字にも表れ、心法を主意とする陰の字が、刀法を主意とする影の字に転化して用いられるようになったと考えられるのである。

ここでは、刀法の研究に伴う「かた」の系統化によって、「陰」が「影」となって現れてきた由が記されているが、戦国時代末期から近世初期は、流派内における第一回目の分流分派が盛んになった時期でもあり、各々の被伝授者の個性が「かた」に現れ、文節的に広がりをもった時期でもある。

事実、新陰流においても、愛洲移香の陰流ではあまり組立ちが存在しなかったのに対して、上泉の新陰流になると「参学(三学)・九箇」など太刀数も増えてきている。また新陰流の理念として捉えられる「転(まろばし)の道」は、上泉によって「転」という勢法として具現化されている。

公重が上泉門下に参籠した時期は明らかでないが、徳川家康の従軍した姉川の戦いが永禄十三年であるこ

とからも、凡そ上泉が宗厳に目録を伝授した頃にこのような改変が成されたものと思われる。いずれにせよ、富永氏の指摘する通りこの時期に剣術界において、内面的な心法重視の傾向から、刀法（技法）重視の方向へと移行し、その表れが「陰」の字から「影」の字へ移り替わっていったものと捉えることができる。そして、新陰流も他の流派同様、そのような方向に傾斜していったと考えられるのである。

#### 六 柳生家の「陰」の継承について

時代も近世に移ると、各地で繰り広げてきた戦乱も終息の方向に向かい、世は天下泰平へと移行する。剣術界においても、「かた」は介者剣術期の様相を呈しているが、本質的には介者を脱却しようとする動きが見られるのも、この時期である。たとえば、柳生利厳が父宗厳から目録を伝授され、介者剣術期の「沈なる身」構えを否定し、素肌剣術としての新たな構えである「直立（つった）たる身」構えを考案したのもまさにこの時期である。（慶長八年『新陰流兵法目録事』、慶長九年『没滋味手段口伝書』）

ところで、この時期の柳生家のどの目録を見ても、

上泉が書き直した「新影流」の文字が見当たらないことは前にも述べた。しかし、上泉の門弟の一人である西一頓が継承した流は、「新影流」と「影」の文字がそのまま使われており、同じく門弟の一人丸目藏人の「タイ捨流」も「新影タイ捨流」と「影」の字が用いられている。（西一頓の目録は慶長十五年、丸目藏人の目録は文禄五年のもの<sup>9)</sup>）同じ門下の継承状況からすれば、柳生家においては一早く元の「陰」の文字に戻したことになる。（時代が下ると、他の流派も「陰」に戻すところが多くなってくる。）

では、この「影」から「陰」への移り変わりはどのように捉えればよいのであろうか。

宗厳の嗣子、柳生宗矩が著した『兵法家伝書』には、次のようなことが記されている。

人をころす刀、却而人をいかすつるぎ也とは、夫れ乱れたる世には、故なき者多く死する也。乱れたる世を治めむ為に、殺人刀を用ひて、已に治まる時は、殺人刀即ち活人剣ならずや。<sup>10)</sup>

ここでは、「殺人刀（せつにんとう）」が人を活かすための「活人剣（かつにんけん）」にならねばならないということが説かれている。つまり、戦国時代におい

て殺戮の目的にのみ使用された剣術が不必要となり、代わって平穩な世に合致した剣術の意義が求められたのである。

同様なことは、利敵の「直立たる身」構えの考案にもいえる。この構え方は、「切る」ための動作を主とした、甲冑の空き所を狙う介者剣術期の構えを否定したものと捉えられる。

しかし、ここで留意しておきたいことは、これらの事象は、戦国時代の「切る」技術の追求から、その技術のエッセンスである技法を通して、その奥にある理念や流儀内の「心」を追求しようとする表われとして捉えられ、戦国時代の剣術技法を全面的に否定しようとするものではないということである。つまり、戦国時代の技法重視を支える理念が、近世に入ることでの新たな理念に変容し、それに適した新たな技法が再構築されていったものと言えよう。

そして、このような志向は、まさに剣術界が最初に有していた「陰」の思想に通ずるところであり、柳生家においても、技術優位の時代に書き直された「影」から、流祖上泉秀綱が最初に命名した「陰」の文字に戻し、それを継承したものと捉えることができよう。

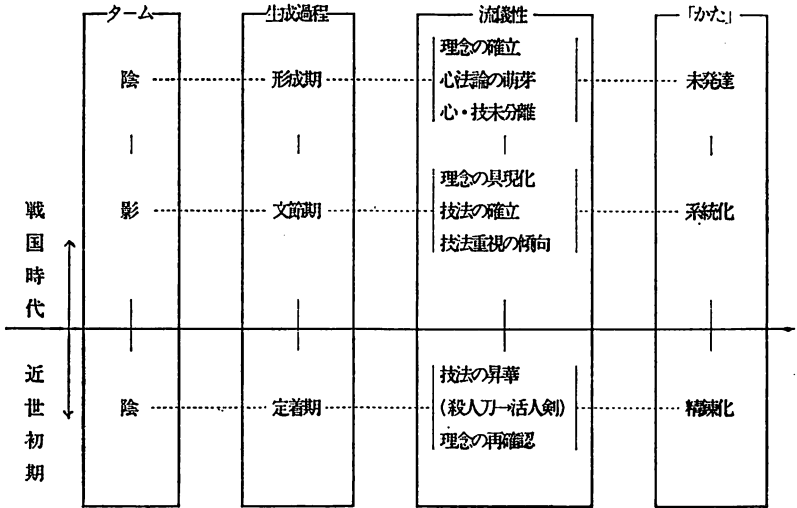
## 七 結 び

「陰」と「影」の二つのタームを交えて、上泉秀綱から柳生家へ継承された新陰流の流れをまとめてみると、図1-1のようになる。

この図に関して若干の補足をしておくと、この「陰」↓「影」↓「陰」は弁証法的に展開し、形成期の「陰」と文節期の「影」との止揚から、定着期の「陰」へと発展する構図になっている。したがって、定着期の「陰」は形成期の「陰」と同様の文字を使用しているが、内容的には昇華されたものとして捉えてよい。

また、形成期の「陰」においては、可視的でない「心」の拠をもとめて修行するといった、ある意味では宗教色の濃い流儀性を有していたのではないかと思われるが、「影」に替わることで、その心を体現する術が追求され、それが「剣」の「術」となり、技法を細分化させ系統化させていったものと考えられる。したがって、この剣の技術を発展させた「影」の時期が存在したからこそ、定着期に逆の方向（「剣」の技術を通して「心」を修養する方向）が志向されたのであり、仮にこの時期がなければ、形成期の混沌とした状態は近世に入っても解決されなかったものと思われる。





—— 脚注並びに引用文献 ——

- (1) 柳生嚴長、大日本雄弁会講談社、一九五七年、二四九頁掲載。
- (2) 『学研漢和大字典』、藤堂明保編、学習研究社、一九八六年。
- (3) 富永半次郎、中央公論社、一九四四年、二七頁。
- (4) 柳生嚴長、大日本雄弁会講談社、一九五七年、六三頁。
- (5) 今村嘉雄、新人物往来社、一九七一年、七二頁。
- (6) 『同 右』。
- (7) 『流派大事典』、綿谷雪等編、東京コピー出版部、一九七八年、一五一頁。
- (8) 前掲書(3)、三一頁参照。
- (9) 『剣道の発達』、下川潮、第一書房、一九八四年。
- (10) 渡辺一郎、岩波書店、一九八七年、一一九頁。